

# 「清心」

文責 校長 中原弘之

学校教育目標 「学校と地域を愛し、知・徳・体の調和のとれた児童の育成」

## 交通事故「0」をいつまでも

交通安全功労団体として、県警本部と県交通安全協会から表彰を受けました。通学路の見守り活動などに積極的に取り組んでいることを評価されたものです。長年に渡り、通学路で交通指導やあいさつ運動をしていただいている保護者や地域の皆様に、改めて感謝申し上げます。しかし、下校時に、広がったり、走ったり、はしゃいだりしている子どもいます。車の通行にも気を配り、注意を受けたら素直に謝り、行動を改める子どもを育て、今後も、交通事故「0」を目指してまいります。

## 一校一徳運動「明るいあいさつ」

本校の一校一徳運動は「明るいあいさつ」です。地域の方々から「あいさつがよくなった。小学校の取組の影響で中学生のあいさつもよくなった。」との声を聞き、嬉しく思っています。あいさつは、相互の心を明るくし、人と人との結び付きをより深いものにしていく大切なものです。明るく元気な声を出すことやおじぎをすることで相手に気持ちを届けるよう指導しています。

## 加配教員の活用による教育活動の充実

本校では、学級数による定数の教員に加え、3～6年の外国語（英語）の能力向上を図るための加配教員や日本語指導や特別支援教育、学力向上など個に応じた支援のための加配教員が配置されています。このほかにも、県の非常勤講師や市の少人数指導非常勤講師、特別支援教育補助指導員、学校司書の配置もあり、教育活動の充実に努めています。

### 祇園歴史の旅（その39）「戦前は高天町、戦後は戸尾市場～実体験の20年の私記録～」(その1)

中部地区町内協議会設立25周年記念誌(平成20年発行)、佐世保史談会会員の筒井隆義さんの記念エッセーより抜粋。「前段までは、残されている資料をもとに書きました。ここからは、昭和12年3月25日、佐世保市高天町110番地に生まれた『筒井隆義』の実体験を中心に記します。

私は家の事情で、祖母筒井セツの養子として育ちました。高天町110番地で私を生んだ母菊枝(22歳)は、戸籍上義姉です。記憶が残っているのは4歳くらいからでしょうか。商才があった祖母は、小佐世保川下流を板張りの暗渠にして設けられていた京町公設市場で店を持ち、のち、自宅隣家を借りて海軍さん、工廠の職工さん10数人相手の下宿屋を始めました。小佐世保川の右岸、峰の坂に通じる通称たいこ橋にほど近く、この川のそばが仲間との遊び場でした。橋のたもとに斉藤食堂、須藤薬局、牛木プリキ屋、持永質屋、機織りの音がいつもパタンパタンと鳴っていた原口帯屋、山口紙箱屋、吉田洋服店、高山すし店、庄山茶舗などがある一角でした。

『ほら、こうもり傘の修繕のくるぞ』とは、イタズラ小僧の私を静かにさせる母の常套句です。当時、『こうもり傘の修繕』とふれながらやってくるおじさんは、実は人攫(さら)いで、連れて行かれてサーカスに売られる、と、私は固く信じ、心底恐れていました。このころ、軍服を着たオイチニの薬売り、鍋釜の修繕とふれ歩く鑄掛け屋など、遍歴の行商人が毎日のように通りを行き交っていました。

昭和17年の春、太平洋戦争さなかの4月にアソカ幼稚園に入園しました。小佐世保通りを下り、現在の天津包子付近にあった西本願寺内が幼稚園舎。遊動円木の前を通過して園舎に入り、冬は持参の弁当を温める保温棚に入れてくれました。桃太郎の鬼退治の劇では赤鬼の役を演じ、遠く川棚の海軍病院まで見舞いに行き、踊りと劇で拍手喝采を受けました。このころ、近所のくだもの屋さんからバナナが消え、お菓子屋さんのウィンドーにあったチョコレートが見られなくなりました。祖母は防空演習にかり出され、母は軍需部勤めをしました。」(続く)

次回は、「戦前は高天町、戦後は戸尾市場～実体験の20年の私記録～」(その2)と題して、筒井隆義さんの実体験の続きをご紹介します・・・。